

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	中須賀 美幸
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 仏教論理学派アポーハ論の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	根本 裕史
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	後藤 弘志
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	衛藤 吉則
審査委員 (Name of the Committee Member)		准教授	赤井 清晃
審査委員 (Name of the Committee Member)	九州大学大学院・准教授		片岡 啓
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、仏教論理学の大成者ディグナーガ（480～540年頃）が言語理論として導入したアポーハ（「他者の排除」）論に対する、ダルマキールティ（600～660年頃）による存在論・認識論的観点からの解釈を考察し、仏教論理学派におけるアポーハ論の展開を解明したものである。</p> <p>序論では、ダルマキールティの著作と関連文献の概要を提示した上で、ダルマキールティの主著である『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章におけるアポーハ論の位置付けを示すと共に、問題の所在を明らかにしている。</p> <p>本論第1章では、アポーハ論に対する存在論的解釈を検討している。まず、ダルマキールティの解釈によれば、〈複数個物に対する概念の同一性を説明する原理〉と〈単一個物に対する概念の多様性を説明する原理〉によって成立する差異こそが言語使用の根拠となること、また、その差異の理論とディグナーガの『取因仮設論』に説かれる仮設有の理論との親和性の高さを指摘する。次に、仮設有の理論に基づけば、複数の構成要素の集合体である壺は非実在であるため、壺などの個物の実在を前提とするアポーハ論は究極的には成立しないのではないかという問題に対し、ダルマキールティは三段階の存在論を立てることで問題解決を図っている点を明らかにすると共に、四段階の存在論を想定する先行研究を批判している。さらに、上記の存在論から派生する認識論的問題にも目を向け、ダルマキールティの見解において全面的知覚は成立しないと指摘している。</p> <p>第2章では、アポーハ論に対する認識論的解釈、特に〈付託の排除〉と確定知の機能について検討している。ダルマキールティが「確定知」と呼ぶ推理と知覚判断は共に〈付託の排除〉に関わるが、前者は実際に起こった付託を除外する機能を持つものに対し、後者は付託の欠如を本質とする点を明らかにした上で、カルナカゴーミン（800年頃）の解釈を分析することによって、先行研究でしばしば誤解されていた「判断」「確定知」「知覚判断」という三つの用語の指示範囲を画定している。さらに、これに関連してシャーキャブッディの真理論についても検討を加え、確定知である知覚判断を生み出す直接知覚は自律的真であるとする彼の見解が、ダルマキールティの確定知の理論の影響を受けたものである点を明らかにしている。</p> <p>第3章では、前章に引き続きアポーハ論に対する認識論的解釈を検討し、特に「共通相をその領域とする語・分別知は、他者の排除（アポーハ）を対象とする」というダルマキールティの言明に対する分析を行なっている。語・分別知は、認識内対象が外界対象として判断された状態のものである共通相（＝共通相 I）と結びつき、外界対象の差異としての共通相（＝共通相 II）に立脚して〈付託の排除〉をもたらす、聞き手を望ましくない対象から回避させる機能を持つことを、ダルマキールティ自身の見解に基づいて明らかにしている。</p>			

結論では、上述の考察結果を踏まえ、もともとディグナーガによって言語理論として導入されたアポーハ論が、ダルマキールティおよび彼以降の仏教論理学派においては、存在と認識に関わる理論として解釈されていると論じている。

付論では、ダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章137～142詩節、同箇所に対する自註、シャーキヤブッディ複註、カルナカゴーミン複註の翻訳研究を提示している。

本論文は、言語理論・認識論・存在論が融合した複雑なダルマキールティのアポーハ論を正確に分析することによって、先行研究の不備を指摘し、ダルマキールティの思想的立場を明確化することに成功している。仏教論理学の思想的根幹の解明に資する研究として評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)